

---

---

DOGEN 2002

## 高祖道元禪師七五〇回大遠忌記念ゼミナール

---

---

宗門きっての実践家で、道元禪師を熱く讃迎する老師が修証義のこころを語る

平成十四年八月三日、黒田武志住職は、ドイツのアイゼンブッフ・禅センター（大悲山普門寺）主催による、「DOGEN 2002」高祖道元禪師七五〇回大遠忌記念ゼミナールに講師として招かれ、「道元思想からみた現代社会へのアプローチ―海外留学僧派遣の意義―」と題した講演を行いました。また、住職より「韋馱天像」「烏枢沙摩明王像」「跋陀婆羅尊者像」の三体が普門寺へ寄贈されました。

五日にミュンヘン郊外のニードーアルタイヒ修道院、七日にはデュッセルドルフのドイツ「恵光」日本文化センターで、デュッセルドルフ大学のベー前教授と共に、ドイツの皆さんと熱く論争を交わしました。

# ドイツでの講演を終えて

善光寺住職

黒田 武志



大遠忌のいまこそ修証義の  
教えを実践するとき

八月初頭、ドイツ、アイゼンブッフ禅センター  
(大悲山普門寺) 主催の「DOGEN 2002  
高祖道元禅師七五〇回大遠忌記念ゼミナール」  
に招かれ講演する。のちパネルディスカッション  
で発言を求められ、西洋人が仏教に何を求め



パネルディスカッション中の黒田方丈（ニーダーアルタイヒ修道院にて）

ているのか、パネルを通じて痛感するところがあった。道元禅師の大遠忌円成も近い今、そのことを念頭に禅師さまに思い致しながらお話しさせていだいた。

私を招いてくれたドイツ大悲山普門寺は、一九九六年禅センターとして開所。その後九七年大本山永平寺貫首宮崎保禅師を拝請開山とする允許を拝受、九八年には本堂・別館が落成した。開所以来、毎年のように永平寺から役寮の御老師方が訪ねている。僧堂として九九年二月に第一回の安居を修され、同寺主監中川正壽老師（慶応大学哲学科出身）は、八〇年以来、当地でその摂心指導にあたっている。パネルディスカッションには中川師とニーダーアルタイヒ修道院元院長のユングクラウセン神父、そして私が参加した。

中川老師が道元禅師の生涯と思想についてお話しし、私は修証義について述べた。

正法眼蔵の教えの中から短く分かり易い文章をもって人間が仏として生きてゆく具体的なあり方、すなわち方法と目標とその意義を明らかに説いた仏教のエッセンスであり、まさしく仏教徒のバイブルだと説明し、時代を超え、全てを超えた、他の宗門に類のない経典であること、さらに時代がどんなに変化しようとも変わることはない人間としての美しい生き方が示されている大切な経典であることを強調した。

ドイツには既に独訳の修証義が刊行されていて、多くの出席者の殆どがその修証義を読んでいるようだった。また、私が駒澤の大学院を修行し、本山総持寺と永平寺で修行を重ね、全国托鉢行脚ののちには、タイ・インドへ釈尊の足跡を訪ね、上座仏教に身を委ねる傍らキリスト教を中心とした西欧諸国を渡り歩いた行履を紹介、その行履の中から、僧侶としてその存在と使命を実感したことを申し述べました。



一見穏やかな雰囲気の中で講演が続いたが、会場がパネルディスカッションに移されたとき、雰囲気ガラリと一変し、出席者から唐突に質問があった。何を訊かれるのかなと思っていると、いきなり、修証義の第十七節を読み上



ニードアルタイヒ修道院で食事参加者

げ、「一体何を言っているのか」と問うてきた。因みに第十七節は、「諸仏の常に此中に住持たる、各々の方面に知覚を遺さず…」に始まり、「…其起す所の風水の利益に預る輩、皆甚妙不可思議の仏化に冥資せられて親き悟を顕わす、是を無為の功德とす、是を無作の功德とす、是れ發菩提心なり。」とあります。当然にして全てやりとりはドイツ語であり、私には日本女性のドイツ公認通訳士川路由美さんが協力して下さった。この人は仏教にも造詣が深く、私の書いたものは全て読んで承知しており、この日に備えてくれていた素晴らしい通訳者だった。そのことの安心があつて、思うがままに話が出来ました。まず私が申し上げたのは、「まさにこれがさとのことなんです！」と。この質問は、言葉の意味や解釈ではなく、本質の本質、その根源的な証悟である「さとり」そのことが何なのか、それを知りたいのだと感じたのです。今ここに

いるドイツ人が求めているのは学問としての修証義ではない。実践の書としての修証義の世界を是非知りたいのだと直感したのです。さらに私は言葉を続けながら、

「ここに花があります」と私は指さした。

「人はこの花を美しいとか美しくないと思う。けれど花そのものは自分が美しいとか美しくないとか、そんなことは何も考えていません。人間であるわれわれが勝手にそう思うだけのことです。そう思うのはこの私の『おのれの心』なんです。昼に食べたカレーライスがうまかったと思うのは『おのれの心』がそう思うだけで、カレーライスはそんなことちっとも思わない。カレーライスとしてそこにあるだけなのです。美しい、美しくない、うまい、うまくないという人間の意識でそこにあるのではない。花そのものの姿、カレーライスそのものの姿。人間と何のかかわりもなくそこに存在している。その

姿をありのままに見る、知ることが発菩提心であり、仏教に謂う『如実知見』、欲望や先入観や固定観念を捨てて見る心こそさとりであり人の喜ぶ心なんです」と申し上げますと、ドイツ人はスツカリ安心して得心の笑顔を頂戴しました。

ややもすると禅の専門家は道元の生い立ちや修行に終始し、生きてゆくうえでの実践につながらないもどかしさを、受け手は感じているように思えるのです。原理原則だけでは、全くとっていいほど西洋人には分からない。また専門家の方々が字句の説明を懇切丁寧に解説しても、彼らには全くとっていいほど分からない。分かるうともしない。ただ、仏教って何なんだ、さとりとは何だ、ということを実践を通し、現象の理を知りたい、知りたがっていると私は思っている。多分、多くの日本人もそれと変わらなものを持っていると思う。私の話は全て体験談、深くありません。しかし面白くもなく分か

りもしない話に拍手を頂いたことは私を驚かすに充分だった。それだけに道元さまの偉大さをいまさらながら感得しました。

### 「諸行無常」が釈尊の大原理の教え

拍手が止むともっと続けてくれというので、私は、インドのお釈迦さまが何を説かれたのか、出家前の釈尊の、四門出遊の話をした。これは生老病死つまり人間は生まれて老いてゆき、病気になるって死んでゆく、このことを釈尊は深く捉え、世の中は全てに移り変わりがあり、諸行無常なのだということをとおさしになった。これが仏教の最も大切な、根本の教えであり、修証義の眼目だからこそ、その第一章に「生を明らかに死を明らかにするは仏家一大事の因縁なり」と書かれてあるのだと説明したのです。

私は、「生とは何ですか、死とは何ですか」と会場に訊いた。誰も答えない。そこで私は「死

も生も同じなんです」と。「今は精一杯生きたら、明日とか何年先とかなんてないじゃありませんか」と。人間どんな生き方をしようとも結果は必ずついてくる、これが道理だったら人に喜ばれるように生きてゆこうじゃないか。もし、それでも悪を働いたら、そのときはどうするのか？ その人は懺悔をしましょう。懺悔滅罪は修証義の第二章である。以下三章受戒入位、四章発願利生、五章行持報恩までのさわりを話したのである。

話が終わると神父は「素晴らしい、よかった！よかった！」と喋って下さった。神父はかつて安谷白雲老師に学んだ人でもある。翌朝、私と顔を合わせた時道元さまの教えは素晴らしくとまた感激を露にしたのである。

さて、われわれ曹洞宗の僧侶は、既に八百年前に道元禅師さまから素晴らしい教えを戴いていて、あとは修証義に書かれていることを限り

なく実践することだ、と私は考  
えている。七五〇回大遠忌に際  
して、私たちが自分に確認すべ  
きことはこのことであり、ただ  
遠くを慮るだけではなく、そこ  
に「道元さま居ますが如く」そ  
のお心を頂き、理に従い「ただ  
実践する」。高祖さまからその促  
しを受けているのだと、心底そ  
れを知ることだと考える。ひる  
がえって曹洞宗の僧侶は何をす  
るのかと問うと、只管打坐だと  
いう。

高祖（道元禪師）さまの禪は  
ひたすら悟りを求める人、一箇、  
半箇のための禪だったと私は思  
う。太祖（瑩山禪師）さまの禪  
は「檀信徒を神・仏と思いで…」

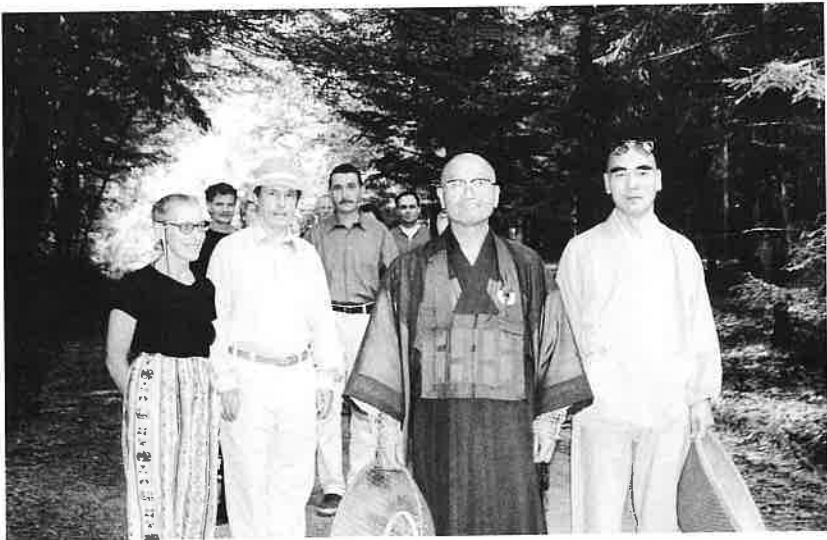


というお言葉に表れているように、  
あらゆる人を包み込む禪だった。  
そして、総持寺の二祖峨山禪師を  
先頭に、数多くの優れた弟子たち  
が草の根を分けて全国に散り、高  
祖・太祖の教えを自ら実践して、  
今日の曹洞宗を築かれた。つまり、  
やはり宗門にとっても実践を旨と  
する人材の育成が、これまで以上  
に待たれているのである。

私は宗教法人横浜善光寺留学僧  
育英会を昭和五九年に設立し、六  
〇年第一回から海外留学僧を送り  
出し、六十三年（第三回）から外  
国僧を日本に受け入れている。既  
に十八回に及んでいるが、これは  
道元禪師の教えを正しく伝えるこ  
とのできる国際的宗教者を育てな



ければならないという、私の大誓願による。横浜の地に善光寺が立てられてから僅か十五年後に発足した横浜善光寺留学僧育英会事業である。周囲は無謀に過ぎるといふ声ばかりだったが、私の誓願を信じて支援していただいた檀信徒のお蔭で今日まで続けられた。これも道元禅師さまの御法恩によるものと、大遠忌に際して改めて御報謝申し上げるところである。





普門寺禅堂

大悲山普門寺  
アイゼンブツフ禅センター  
について

大悲山普門寺・アイゼンブツフ禅センターは、大本山永平寺七十八世宮崎奕保禅師を開山として拝請し、日本曹洞禅の伝統に根付きつつ、仏教としての禅の本質を究め、またその教えを普及することを使命として、ドイツ南部に建立されました。

東洋と西洋の文化および宗教的背景の違いゆえ、ヨーロッパにおいては従来の伝統を単に形式的に継承することだけでは十分ではありません。それゆえ大悲山普門寺は東洋と西洋の肯定的総合を目指し、もって今日の要請に応えるこ



冬のアイゼンブッフ

とを目的としています。

地球一体化に一層の拍車がかかっている今日の世界状況にあつては、精神界においても地球レベルの覚醒と変革及び他の宗教や精神領域との接触交流の必要性が高まっているのです。

地理的、政治経済的にヨーロッパの中心であり、今後益々その重要度を増していくであろうドイツに基盤をおく普門寺は、ヨーロッパ発信の仏教文化交流活動に積極的に参与していくことを目指しています。

また現地社会に根付きつつ、現代世界の問題に、仏教精神に涵養された人材の育成を通して、今日の地球社会に貢献することを目標にしています。

### ●活動内容●

常住修行者、一般修行者の育成所として、ドイツ語圏ばかりでなく、英語による国際的な接触交流を推進し、日本の伝統に学びつつも、西

洋の歴史的・文化的条件および要望に適った独自の修行道場を確立。坐禅修行、仏教学習と仕事を日課とし、さらに安居期間を設け、集中的な修行および学習を定期的に行っています。

西洋の禅修行にあつては、坐禅修行とともに基礎学習が重視されるべきです。さらに教理学習と修行実践とは現代人の日常生活に深くかわり、役立つものでなければなりません。

そのために、一般参加者を対象とする様々な接心・ゼミナールの形式は、参加修行者の必要性に応じて計画し、その日課には、接心の種類により提唱、基本教理学習、堂頭との個人面談、仏法についてのグループディスカッション、戸外での歩行瞑想、そして体操などを組み込んでいます。

また禅・仏教・東洋精神を紹介し、理解を得るために、茶道、華道、書道、尺八等仏教に育まれた日本文化のゼミナールを設けたり、定期

的催しを企画・実行しています。

さらに比較宗教学、東洋思想、西洋思想、禅仏教等に詳しい各界の専門家を招き、定期的にシンポジウムを開催しています。

### 社団法人 ドイツ「恵光」日本文化センター

デュッセルドルフ市の一角、ニードカッセル地区に設立されました。このセンターは、仏教寺院、大小の日本庭園、お茶室つき日本家屋からなり、建物の半地下には展示室、講堂（釈迦堂）、三つのゼミナール室が造られ、また図書館と幼稚園も設置されています。



ドイツ「恵光」日本文化センター

デュッセルドルフはヨーロッパでもっとも深く日本と関わりのある町です。「恵光」日本文化センターの設置によって地元の文化に育ったドイツの人々は、日本固有の行事・慣習を理解する機会に恵まれることになり、同時に当地在住の多くの日本人も日本文化の親しみ深い行事に参加し、それを通してドイツ人との交流を深めることができるようになりました。東西の文化交流、相互理解の場となることがセンターの基本的な課題です。

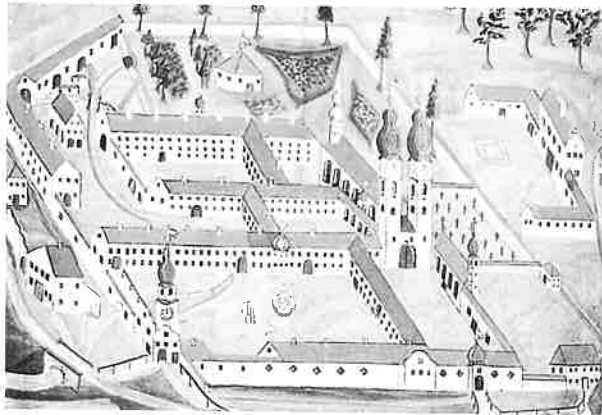
ドイツ「恵光」日本文化センターでは、次のような行事が催されます。  
彼岸会、盂蘭盆会、座禅会、講演会、展示会、演奏会、映画会など。

## ニーダーアルタイヒ修道院

ドイツ南東部 Bavaria 州の、オーストリア国境に接する市で、パッサウから四五キロの場所にある。創設は七三二年。

修道院はカソリックで、元ビール製造所であった場所にビザンティン式のチャペルが作られ、ニーダーアルタイヒの村人が参拝に使用している。現在この修道院は、東方正教会と西洋カソリック教会の相互理解を深めることに力を注いでいる。

修道院は小学校、高校としても使用され、会議室や研修所としても利用されている。学校では地域の伝統文化を伝え、キリスト教の精神を



1803年に描かれたニーダーアルタイヒ修道院

教えることを目指しつつ現代教育を施している。敷地内には散歩やハイキングコースがあり、近くには国立公園もある。